

美術科教育学会通信 No.123 2026 年 10 月 20 日

□巻頭言 □第 49 回大分大会案内（第二次） □第 1 回理事会報告 □宮脇先生追悼 □書評 □リサーチフォーラム案内 □本部事務局より

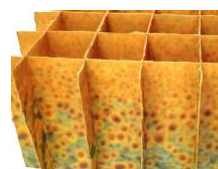
巻頭言 Introduction

世界の美しさと痛みに向き合う；美術教育の「言葉」を取り戻す

Facing the Beauty and Pain of the World : Reclaiming the "Language" of Art Education

代表理事 佐藤賢司（大阪教育大学）

Representative Director : Kenji SATO, Osaka Kyoiku University



Kenji SATO, "HIMAWARI"
24th international
exhibition of textile
miniatures

「危機」ということ

今、私たちを取り巻く環境は大きく変わっています。世界各地の異常気象、とりわけヨーロッパを襲った熱波や、東アジアの記録的な猛暑は、気候変動対策に残された時間が決して多くないことを私たちに突きつけています。氷河崩落による甚大な被害の様子には言葉を失ってしまいます。オラファー・エリアソンの《アイス・ウォッチ》が示した 10 年以上前の警鐘は、今日では、さらに切迫した意味を帯びているように感じられます。

また世界の情勢に目を向ければ、終わりの見えない戦争・紛争、そのことによる直接的・間接的な人道的危機が絶えません。公私問わず、言論空間では、他者への想像力を欠いた暴力的で独善的な思想が氾濫しています。世界は、私たちに「新しい戦前」とも形容されるような不安を抱かせる状況にあります。

かつての惨禍への自戒を込めた反省が消え去り、パワーバランスでの勝利と人々の高揚のみを後ろ盾にする眼差しが、世界各地で穏やかな社会を根底から破壊しつつあるというのは言い過ぎではないでしょう。

「勝つこと」「蹴落とすこと」にとりつかれた社会は、これまでの「危機」をはるかに超える深刻な局面を現実のものとしているように感じます。

眼差しが意味するもの 空虚な未来の先に

もちろん情報技術などの革新・発展は、これまで想像の世界でしかなかった「豊かで便利な未来」を現実のものとして見せてくれてはいます。それは一見「希望」のようにも見えます。しかし、こと具体的な、「前向きな出来事」も、私たちの未来（への眼差し）をより明るいものにしているとは限りません。

「未来」を掲げる大規模な社会的プロジェクトにおいても、理念と現実との間には少なからぬ隔たりが見られました。環境や共生を掲げながら、その実践が十分に伴わない現実に接するたび、私たちは「未来」という言葉の意味そのものを問い直さざるを得ません。

自然との共生をうたい、被災地の復興住宅などへの再利用を掲げた巨大な建造物も、実際の再利用はほんの一部に過ぎず、その 8 割が「再生チップ」へと姿を変えたそうです。このようなある意味虚しさを覚えるような現実が「輝く未来」の象徴だとするならば、私たちは、未来をどう前向きに描けばよいのでしょうか。

芸術の視点で見れば、「太陽の塔」の深遠で本質的な問いが、今なお生き続けているのは一縷の望みではあるでしょう。しかし、今経験していることが、同じ名のイベントの結果であることは皮肉なことにも思えます。「レガシー」という言葉がトレンドワードの様に流行し、免罪符かのような「事後的な価値づけ」が起こっていますが、その正体は、巨大な虚無感の裏返しのようにすら映ってしまいます。

さて、このようないわば絶望とも言える時代、人としてまっとうに生きる尊厳そのものが脅かされるこのような現代において、私たちの美術教育はどのような役割を果たし、自らを深め、またいかなるメッセージを子どもたちに手渡せるのでしょうか。

ことさらに悲観的なことに積極的な意味を見いだすことはできませんが、そうかといって、楽観的に無批判に現実を身をゆだねていては、いずれ美術教育そのものの存在意義が揺らいでしまうかもしれません。

意志ある眼差しと危機感こそが、時に未来を拓く原動力にもなり得るのではないのでしょうか。

先達の思いと言葉

今年に入って私たちは、本学会の一ひいては「美術教育」の一強固な礎を築いてくださった偉大な先輩方の相次ぐ訃報に接しました。その顔やお声を思い出すたび、深い喪失感を覚えると同時に、私たちは今、美術教育のあり方を根本から問い直さなければならない、大きな時代の転換点に立っていることを痛感せずにはいられません。

本学会の多くの先輩たちは、黎明期の美術教育をまさに思想的・学問的に形づくった先達です。単なる技法の手引きや、形骸化した輸入教育理論の解説者ではありませんでした。それぞれの内に、確固たる哲学を宿し、人間と世界を、子どもと芸術を見つめる深い眼差しから、熱い血の通った言葉を紡いでおられました。それらの言葉は、今につながる美術教育学という研究分野の輪郭を形づくり、その性格を決定づけ、私たち後進を励ます強い後押しとなっていました。それだけに、失ったものの大きさは計り知れません。私自身も、今年春の最大の恩師の訃報に際し、自分自身の身体と言葉の半分を失ったような状態が長く続きました。

前号と今号にわたり、橋本泰幸先生、宮脇理先生への追悼文を寄せてくださった執筆者のみなさまと、ゆかりのある多くの会員のみなさまとともに、改めて深い哀悼の意と感謝を捧げたいと思います。

その大きな背中を見失いかけている今、私たちは改めて、自分たちの「眼差し」がどこに向いているのか、自らの「言葉」を、自戒を込めて問い直す必要があるのだと痛感しています。

「思考しているような思考停止」に陥らないために

学会の研究発表（論文・口頭）とは別に、近年、教育界では「〇〇思考」や「〇〇学習」といった言葉が各所・各教科を席卷しています。かつての「SDGs バブル」の時代のように、時流に乗ったトレンドワードを冠した実践分析も数多く見られます。もちろん、こうした考え方そのものを否定するものではありません。それらは本来、教育を豊かにする重要な視点です。しかし（あくまでも仮にですが）、それらがもしマニュアル化され、ツールとして消費されているのだとしたら、本来の教育の問いが見失われる危険があります。流行のフレームワークに適応することだけが教育の役割なのでしょうか。少なくとも私たち美術教育の立場は違うはずです。

美術—芸術を通した教育を深く思考する私たちが本来向き合うべきは、言葉にならない不安や、他者の痛み、割り切れない世界の矛盾といった、生の現実から切実に導き出される「本質的な問題」のはずです。

何をするのか、何をつくるのか、何を感じるのか
—厳密な正解のない、極めて特別な教科である図画

工作・美術科は、このような「本質的な問題」に密接に関わる稀有な教科です。なぜならその場合は、否応なく子どもの〈今・ここ〉を生きる時間と、これまでに生きた時間が刻まれる空間だからです。

そして、こうした混迷の時代だからこそ、私たちは自らが拠って立つ「美術」や「デザイン」という世界が持つ、本質的な問いや思想の深さにも、今一度立ち還る必要があります。

美術は、社会の欺瞞やコマーシャルイズムの濁流に安易に回収されることを拒み、世界の不条理を鋭く告発し、人間の実存的な問いを突きつける思想的深さを持っています。また、近年大規模な回顧展が企画され、その足跡があらためて見直されているカイ・フランクのような近代デザインの歩みにも、同様の強い意志が流れています。戦後の物資不足や住宅難という過酷な生の現実の中で、人々の暮らしに実直に寄り添い、社会的な課題を解決しようとした彼の仕事は、まさに「デザインの良心」そのものでした。その哲学は、現代の利便性や経済効率を追い求める表層的なスキルとしてのデザイン思考とは一線を画す、人間の生への誠実な眼差しに基づいています。

アートやデザインが持つこうした「思想的深さ」や「良心」、そして何より子どもの学びを言語化する研究のあり方も、今一度見つめ直さなければなりません。体裁だけを整えた形式的な論文や、先行研究の枠組みをなぞるだけの「研究のための研究」は、時に読み手との断絶を生み、心に届かないことがあります。私たちの紡ぐ言葉が血肉を持ったものでなければ、教育現場における「子どもとの接面」に深い意味をもたらすことはできません。論文という形式を超えて、書き手の思想が、目の前の子どもの（いのち）に届くかどうかとも問われているのです。

今こそ私たちは、時代の表層的なトレンドから静かに一步を引き、先達が遺した思想の重みを噛み締めるときを迎えているのではないのでしょうか。即効性を過度に求めたり、流行の言説に依存したりすることをやめ、人間の根源に触れる時間として、美術教育の本来の役割を丁寧に見つめなおしていきたいと考えます。生の現実から問いを導き出し、子どもたちと共に、世界の美しさと痛みに向き合うこと、それは、美術教育だからこそ可能な、人間への深い信頼に支えられた営みでもあります。そのような希望を、私たちは子どもたちとともに育み続けたいと思います。

第49回 大分大会案内（第二次案内）

Notice of the 49th Conference in Oita : Details about the Conference

第49回 美術科教育学会 大分大会
大会実行委員長 藤井康子(大分大学)



- 開催日：2027（令和9）年3月20日（土）～21日（日）
- 場所：大分大学旦野原キャンパス 教育学部棟、教養教育棟（〒870-1192 大分県大分市大字旦野原700番地）
☆懇親会☆ アートホテル大分 2階グランドホール（〒870-0034 大分県大分市都町2-1-7）
- 開催方法：対面開催
- 主催：美術科教育学会，共催：国立大学法人大分大学，後援：（申請準備中）国際美術教育学会 InSEA，大分県教育委員会，大分市教育委員会
大分大会ホームページ：<https://sites.google.com/view/jaaedresearchconference49th/>
※ 情報を随時追加・更新してまいりますので、ご確認ください。

〈大会テーマ〉 ローカルからグローバルへ，グローバルからローカルへ From the Local to the Global and Back Again

グローバル化が進む現在，足元の「ローカル（地域）」特有の文化や価値を見つめ直し，それをいかに「世界」へと開き，また世界の多様な視点をどのように地域へと還流させていくかが問われています。この双方向の循環は，次世代の創造性を開き，未来へつなげる教育の在り方を考える上で重要な鍵となるのではないのでしょうか。近年，学校教育における美術教育の実践及び研究は，地域社会との接続を強めるとともに，個人やコミュニティのウェルビーイングの向上に寄与する存在としての意義が高まっていると言えます。特に，身体的経験や文化的文脈に根ざしたローカルな実践は，人々の関係性や自己理解を深める上で重要な役割を果たしており，グローバルな視点との往還の中でその意義が再解釈され，新たな価値を生み出しています。本大会が，ローカルとグローバルの架橋となる美術教育の実践及び研究の未来像を構想する契機となれば幸いです。

■大会日程（暫定版）

【1日目】2027（令和9）年3月20日（土）受付8:45～ 開始9:30～，16:10 終了予定（懇親会は20:30 終了予定）

9:30～11:45	研究発表Ⅰ ①9:30～10:00 ②10:05～10:35 ③10:40～11:10 ④11:15～11:45	教育学部棟1～3階
11:45～13:15	昼休憩・論文投稿ランチカフェ	
13:15～14:15	開会行事／総会	
14:30～16:00	実行委員会企画シンポジウムⅠ【教育学部創設150周年・教職大学院開設10周年記念関連行事】『ローカルからグローバルへ～ウェルビーイングと美術教育の未来～』	教養教育棟 第二大講義室
16:00～16:10	諸連絡等 (懇親会会場への直行バス，美術館やアート関係の案内等)	
18:30～20:30	懇親会・表彰式 18:00 開場	アートホテル大分

※ 総会は，大会1日目 13:15～14:15 教養教育棟第二大講義室にて開催予定です。

【2日目】2027（令和9）年3月21日（日） 受付8:45～ 開始9:30～, 16:50 終了予定

9:30～10:35	研究発表Ⅱ ①9:30～10:00 ②10:05～10:35（国際研究セミナー開催）	教育学部棟1～3階
10:45～12:15	実行委員会企画シンポジウムⅡ 『激減する知的コミュニケーションの世界における美術教育研究の再構築』（仮）	教養教育棟 第二大講義室
12:15～13:00	昼休憩	
13:00～15:15	研究発表Ⅲ ①13:00～13:30 ②13:35～14:05 ③14:10～14:40 ④14:45～15:15	教育学部棟1～3階
15:20～16:50	研究部会（5部会）	教育学部棟2～3階

■大会までのスケジュール

（研究発表を行う方）

参加登録期間（参加費納入期間）	2026年11月1日（日）～2027年1月23日（土）
研究発表の演題登録期間	2026年11月1日（日）～2027年1月23日（土）
研究発表概要集原稿 提出締切	2026年11月1日（日）～2027年1月23日（土）
研究発表プログラムの公開（大会 Web サイト・通信）	2027年2月20日（土）頃を予定

（大会参加のみの方）

参加登録期間（事前申込み） ※ 早割	2026年11月1日（日）～2027年3月10日（水）
参加登録期間（事前申込み後 ～ 当日）	2027年3月11日（木）～2027年3月21日（日）
研究発表プログラムの公開（大会 Web サイト・通信）	2027年2月20日（土）頃を予定

（懇親会に参加する方）

参加登録期間（事前申込み制） ※ 参加登録期間後は要相談	2026年11月1日（日）～2027年3月10日（水）
---------------------------------	-----------------------------

■参加費・懇親会費

	大会参加費		懇親会参加費	
	事前申込み	3/11以降の申込み	事前申込み	3/11以降の申込み ※ 要相談
支払い方法	Web・現金決済	会場にて現金払い	Web・現金決済	会場にて現金払い
正会員 ^{*1}	5,500 円	6,000 円	8,500 円	10,000 円
会員以外（一般）	6,500 円	7,000 円	10,000 円	12,000 円
学生会員 ^{*2}	3,000 円	3,500 円	5,500 円	6,500 円

^{*1}「大学美術教育学会」または「日本美術教育学会」または「国際美術教育学会：International Society for Education through Art, InSEA」の会員は、本学会会員と同様に、正会員の料金で参加することができます。

^{*2}「学生会員」は、本学会に「学生会員」として登録済みの会員のことを指しています。なお「学生会員」に該当している方は、在職の有無は問わず、「学生会員」の料金でご参加いただけます。それ以外の学部生・大学院生、聴講生、研究生、科目等履修生は「正会員」「会員以外（一般）」のどちらか該当する方となります。

■申込み方法について

本大会の申込み種別は、「①大会参加登録（大会参加申込み）」「②演題登録（口頭発表申込み）」「③懇親会参加登録」の3種類です。大分大会 Web サイト(<https://sites.google.com/view/jaaredresearchconference49th/>)から参加登録を行ってください。支払方法は Web 決済：クレジットカード払い、後日郵送：コンビニ払い、決済アプリから選択することができます。事前申込み期間終了後も、大会 Web サイトにて参加登録を行うことができますが、参加費等のお支払いにつきましては、大会当日、会場受付にて現金でお支払いください。「②演題登録（口頭発表申込み）」を希望される方は、同時に「①大会参加登録（大会参加申込み）」も行ってください。事前申込み期間後の「③懇親会参加」については、会場収容人数の都合上、ご希望に添えない場合がございます。事前に

大会事務局までご相談ください（お問い合わせ先：jaaed_oita2026@googlegroups.com）。ご入金後の参加キャンセルによる返金は、2027年3月10日（水）17:00までのお申し出に限り、返金手数料を差し引いた金額を返金いたしますが、それ以降は返金いたしかねます。あらかじめご了承ください。当日不参加となられた場合でも、事前参加登録を完了（入金済）されている方には大会終了後に研究発表概要集を提供いたします。天災地変その他やむを得ない事情により大会が中止となった場合の対応につきましては、大会 Web サイト等で案内いたします。

■参加登録・演題登録について

- ① 大分大会ホームページの「参加申込はこちら（Registration）」をクリックしてください。
- ② Google フォームにお名前、ご所属、口頭発表の有無、メールアドレス等の連絡先、支払い方法の選択、領収書の有無等をご記入ください。
- ③ 大会開催に関するご案内等をご登録いただいたメールアドレスへ随時配信いたします。
- ④ Google フォームにて支払い方法「コンビニ払い」または「決済アプリ」を選択された方には、追って振込用紙を郵送でお送りいたします。
- ⑤ 3月に名札（ネームカード）のデータをメールにてお送りいたします。お手数ですが、各自で事前に名札を印刷の上、当日会場受付へご持参ください。会場受付では名札ケースのみをお渡しいたします。

■研究発表（口頭発表）について

- （1）発表資格：研究発表は、口頭発表のみとなります。本学会会員（申し込み時点で、当該年度までの会費を完納していること）が筆頭発表者として出席できる条件です。共同発表の場合は、筆頭発表者が会員であれば、そのほかに何名でも発表資格を有する共同研究者として認められます。
なお、発表者は全員、参加登録と参加費納入が必要です。
- （2）発表時間：口頭発表 20 分、質疑応答 10 分（計 30 分）
- （3）使用機器：発表にパソコンやタブレット等を使用する場合は、各自で持参してください。プロジェクターへの接続は HDMI が基本です。Mac, iPad 等の接続は各自変換アダプターをご用意ください。プロジェクターへの接続を通し、パワーポイント等で音声（音声つき動画を含む）を流すことを希望される方は、「②演題登録」の際に投稿フォームの専用欄からその旨をお伝えください。

■会場までのアクセス

大分大学ホームページ（<https://www.oita-u.ac.jp/index.html>）、アートホテル大分ホームページ（<https://iconia.co.jp/hotel-art-hotel-oita-oita/>）等でご確認ください。

■宿泊に関して

宿泊施設の確保・斡旋は行っておりません。各自で早目のご予約をお願いいたします。

■昼食について

大会期間中は会場付近にキッチンカーを数台出店いたしますので、ぜひ、地元・大分のご当地グルメをお楽しみください。なお、会場周辺のコンビニエンスストアは、大分大学前駅（JR 豊肥本線）の前にある「ローソン」およびキャンパス内にある「ファミリーマート」（※ 20 日（土）のみ営業）をご利用いただけます。

＜大分大会実行委員＞ ※敬称略（2026 年 10 月現在）

実行委員長・事務局長：藤井 康子（大分大学）

実行委員：廣瀬 剛（大分大学）、村上 佑介（大分大学）、石田 翔太（大分大学）、永井 学（大分県立芸術文化短期大学）、白石 恵里（大分県立芸術文化短期大学）、栗山 裕至（佐賀大学）、笹原 浩仁（福岡教育大学）、松久 公嗣（福岡教育大学）、田中 美貴（福岡教育大学）、幸 秀樹（宮崎大学）、直江 俊雄（筑波大学）、新井 馨（西九州大学）、牧野 由理（埼玉県立大学）、片桐 彩（新潟大学）、畑山 未央（植草学園大学）、山木 朝彦（鳴門教育大学名誉教授）

【大分大会に関するお問い合わせ】下記のアドレス宛にご連絡いただけますようお願いいたします。

（全 般） 第 49 回美術科教育学会大分大会事務局 jaaed_oita2026@googlegroups.com

（外国語対応）英語プレゼンテーションサポートチーム JAAEd English Presentation Support Team
jaaed-english-support@googlegroups.com

2026 年度 第 1 回 理事会報告

Report on the First Board of Directors Meeting for the Fiscal Year 2026

本部事務局 渡邊美香（大阪教育大学）

2026 年度第 1 回理事会は、2026 年 9 月 5 日（土）13 時 00 分からオンライン（Zoom）にて開催された。最初に佐藤賢司代表理事の挨拶があり、続いて竹内晋平副代表理事を議長として議事が進められた。なお、出席した理事は 22 名、委任状提出 2 名の計 24 名であり、理事会成立条件が満たされていることが確認された。理事会終了は 16 時 30 分であった。

【審議事項】

I 総務部関連

1. 第 49 回大分大会の実施について

藤井康子理事・大会実行委員長より、資料に基づき、第 49 回美術科教育学会大分大会について、2027 年 3 月 20 日、21 日に大分大学で対面開催すること、大会テーマ、研究発表、大会企画、参加費・懇親会費、英語発表等の実施計画が示された。その際、大会参加費が例年とは異なる設定であること、通常 20 万円の大会補助に加え、必要な場合は 10 万円まで追加補助することも含め、審議を行った結果、賛成多数で承認された。あわせて今後、大会補助費の基準額について物価上昇等を踏まえ見直すこととした。

2. 第 48 回東京（早稲田）大会の収支決算報告について

大泉義一副代表理事・前大会実行委員長より、第 48 回東京（早稲田）大会における大会運営と懇親会の収支決算案について資料を基に説明があった。懇親会は不足分を大会運営費から補填したこと、大会企画の報告書を全会員に送付することが報告された。審議の結果、原案通り賛成多数で承認された。

3. 2026 年度第 2 回理事会・総会の開催時期及び開催方法について

竹内副代表理事より、第 2 回理事会について、事前に行った日程アンケートを踏まえ、今回は第 2 回理事会を 3 月 13 日にオンライン開催すること、総会は、3 月 20 日に対面開催（委任状は WEB 提出）すること、が賛成多数で承認された。なお、原則は第 1 回理事会（9 月）についてはオンラインで、第 2 回理事会（3 月）については対面での開催を維持し、今回の変更は個別事情によるものと確認した。

4. 新入会員及び退会者の承認について

渡邊美香理事から画面共有により、3 月の理事会以降 8 月 18 日までの 33 名の新入会員申込者および 21 名の退会・退会予定者について説明があった。審議の結果、賛成多数で承認された。2026 年 8 月 18 日での正会員数は 605 名、学生会員は 62 名、賛助会員 4 団体、会員数は計 671（うち国外 30 人）となった。

5. 選挙関連規定の改定について

竹内副代表理事より、次年度の役員選挙に向け、「役員選出に関する細則」及び「役員選出規程」の改定について提案があった。学会通信のオンライン化に伴い有権者名簿（案）の作成後、「掲示または送付」できるようにすること（同細則第 4 条）、役員選出理事会について委任状の提出を入れること（同細則第 14 条）、70 歳以上に加えて合理的理由を有する正会員も名簿登録を辞退できるようにすること（同規程第 3 条）、有権者名簿（案）等が WEB 掲示になる可能性を踏まえ、「選挙管理委員会を含むすべての会員は個人情報の保護に努めなくてはならない」旨を加えること（同細則第 3 条）について審議し、賛成多数で承認した。以下改定された新旧対応表を示す。

●役員選出に関する細則 改定箇所（第 3 条、第 4 条、及び第 14 条）

現行	改定後
第 3 条 選挙管理委員会は、5 月末日を目途に、投票が行われる年の 1 月 1 日現在において 2 年以上の会費滞納のない本学会正会員（以下「正会員」という。）を対象に、確認用の有権者名簿（案）を作成する。	第 3 条 選挙管理委員会は、5 月末日を目途に、投票が行われる年の 1 月 1 日現在において 2 年以上の会費滞納のない本学会正会員（以下「正会員」という。）を対象に、確認用の有権者名簿（案）を作成する。 <u>なお、選挙管理委員会を含むすべての会員は個人情報の保護に努めなくてはならない。</u>

第4条 選挙管理委員会は、確認用の有権者名簿（案）を、投票が行われる年の6月発行の学会通信に同封して送付し、修正事項の届出及び役員選出規程第3条2に定める被選挙人名簿への登載辞退を受け付ける。 (1) 修正事項の内容は、氏名、選挙権の有無、誤謬等とする。 (2) 修正及び被選挙人名簿への登載辞退の受付期間は7月末日までとし、文書により、選挙管理委員会に届け出る。	第4条 選挙管理委員会は、確認用の有権者名簿（案）を、投票が行われる年の6月発行の学会通信に同封して<u>掲示または送付</u>し、修正事項の届出及び役員選出規程第3条2に定める被選挙人名簿への登載辞退を受け付ける。 (1) 修正事項の内容は、氏名、選挙権の有無、誤謬等とする。 (2) 修正及び被選挙人名簿への登載辞退の受付期間は7月末日までとし、文書<u>または電子メール</u>により、選挙管理委員会に届け出る。
第14条 選挙管理委員長は、選出理事決定後、すみやかに選出理事会を招集し、投票結果を報告するとともに、会則第13条(2)から(4)に定める代表理事、副代表理事、推薦理事及び監事の選出を委任する。	第14条 選挙管理委員長は、選出理事決定後、すみやかに選出理事会を招集し、投票結果を報告するとともに、会則第13条(2)から(4)に定める代表理事、副代表理事、推薦理事及び監事の選出を委任する。<u>なお、選出理事会の欠席者に対しては、委任状の提出を求めることができる。</u>

●役員選出規程 改定箇所（第3条）

現行	改定後
第3条 理事選挙の選挙権者及び被選挙権者は、選挙が行われる年の1月1日現在において、2年間を超える会費滞納のない本学会正会員（以下「正会員」という。）とする。 2 70歳以上の正会員は、被選挙人名簿の登載を辞退することができる。なお、辞退する場合には、役員選出に関する細則に定める期日までに申し出るものとする。	第3条 理事選挙の選挙権者及び被選挙権者は、選挙が行われる年の1月1日現在において、2年間を超える会費滞納のない本学会正会員（以下「正会員」という。）とする。 2 70歳以上の正会員、<u>または合理的な理由を有する正会員</u>は、被選挙人名簿の登載を辞退することができる。なお、辞退する場合には、役員選出に関する細則に定める期日までに申し出るものとする。

6. 叢書第7号企画案について

宇田秀土理事・叢書企画編集委員会委員長より、7月9日に叢書企画編集委員会が開かれ、茂木一司氏（跡見学園女子大学）が第7号の責任編集者として企画を進めている旨説明がなされた。刊行計画案については、同号で茂木氏とともに企画を担当する池田史志副代表理事から資料を基に提案があった。テーマは「インクルーシブアート教育の現在とこれから―多様性と共に生きる美術教育」とし、障害に加えてジェンダー、脳機能、防災に関することも含む広いインクルージョンを扱う構成案が示された。執筆者は調整状況に応じ叢書企画編集委員会に一任すること、学術研究出版から2028年3月刊行を目指すことについて、賛成多数で、承認された。

II 研究部関連

1. 学会誌第48号編集について

池田副代表理事より、投稿状況及び今後の編集日程について資料を基に説明があった。第48号の投稿数は54編（前年より19編増）であったことが報告された。例年通りのスケジュールで進め、3月下旬の刊行を目指すことが示された。編集・査読体制について賛成多数で承認された。

2. 査読要領の改正について

池田副代表理事より、生成AI利用に関し、未公表の投稿論文・査読内容をそのまま生成AIへ入力しないこと、また、生成AIで自動生成した査読コメントをそのまま査読結果として提出しないことを査読倫理に追加する案が示され、審議の結果、賛成多数で承認された。

3. 令和8年度第24回『美術教育学』賞選考について

『美術教育学』賞選考委員長として郡司明子理事より、以下選考委員（敬称略）を推薦したことについて説明・提案がなされ、承認された。

ア号委員…郡司明子（選考委員長） イ号委員…佐藤賢司（代表理事） ウ号委員…池田史志（学会誌編集委員長） エ号委員…内田裕子、清田哲男（選考委員長推薦の理事） オ号委員…石崎和宏、小池研二（学会誌編集委員長推薦の会員）

III 事業部関連

1. InSEA 学会発表支援事業の対象拡大について

中村和世理事より、これまでの InSEA 学会発表支援事業に応募実績がなかったことから、InSEA に限定せず、海外の学会発表全般を支援対象に広げた事業として検討していくことについて提案があった。規定案を国際局で整理し、3月の理事会で更新案を提示する方針について、賛成多数で承認された。

2. 美術科教育学会大分大会における英語発表枠について

直江俊雄理事より、早稲田大会に続き、大分大会でも英語による研究発表枠を設ける方針について提案があり、承認された。

【報告事項】

I 総務部関連

1. 第48回東京（早稲田）大会報告

大泉副代表理事・前大会実行委員長より、資料を基に、大会報告は学会通信122号に掲載済みであること、日本教育学会刊行『教育学研究』誌にも報告済みであること、大会企画の報告書を9月中旬ごろに全会員へ送付することが伝えられた。この報告書は、『教育美術』6月号に掲載された大会企画の抜き刷りとなっており、奥付に協力者を掲載した。また、前回理事会で決定したPeatixの学会専用アカウント引継ぎについては、大会実行委員会が使用を判断した場合は新規に作成せず、既存のアカウントを継続使用することとなっており、必ずしも大会でPeatixを使用しなければならないということではないことを確認した。

2. 会費納入状況、学生会員について

渡邊理事より、画面共有にて8月18日現在、2026年会計年度の学会費を納入している正会員は76%であること、滞納者一覧、正会員から2名の学生会員移行申請があったことについて報告がなされた。また、本年度から会費督促を郵送からメールに変更したが、納入率は例年と大きく変わらず、現時点では大きな影響は見られていないことが確認された。

3. 学会HP保守業務の契約更新について

手塚千尋理事より、見積書を画面共有しつつ、例年通り更新手続きを行ったことが報告された。

4. 学会通信 No. 123 の編集について

佐藤絵里子理事より、次号『学会通信』について、10月20日掲載予定で編集を進めていること、割付について報告があった。リサーチフォーラムの追加記事は必要に応じ、期限内に連絡することが伝えられた。

5. 令和9年度第50回大会について

佐藤代表理事より、第50回大会は、2028年3月18日、19日、福島大学を会場とする南東北大会として、福島大学、宮城教育大学、山形大学を中心に準備していることが報告された。

6. 叢書企画編集委員会叢書第6号進捗状況及び叢書販売報告

宇田叢書企画編集委員会委員長より、第6号「〈教育改革時代〉の美術教育」の進捗状況について、現在、執筆作業中で、編集協力者を増やし、10月末締め切り後に校閲を進め、今年度3月刊行を目指している旨が報告された。また、資料を基に2026年前期叢書の販売実績について、各号が継続して売れており、最新の第5号の売り上げが最も多く、今年度これまでの売り上げは約8万3千円であったとの報告があった。

II 研究部関連

1. 学会誌のJ-Stageへの掲載について

藤井理事より、『美術教育学』第47号のJ-Stageへの登録・公開作業を7月7日に完了したこと、7月9日に支払いも完了したことが報告された。

2. 学会誌のEBSCOへの収録について

池田副代表理事より、資料を基にEBSCOのデータベース「Education Source」に第47号の掲載論文が収録されたことが報告された。長年の編集・刊行実績の蓄積による成果として確認された。

3. 『美術教育学』賞の現状と課題について

池田副代表理事より、資料を基に、これまでの議論の経緯を振り返りつつ、この件に関する検討を継続していく旨の報告がなされた。これを受けて、理事の間から様々な意見が出された。

4. 教科教育学コンソーシアムについて

郡司理事より、3月に「ビッグアイデア」をテーマに各教科の中核的概念をどのように捉え構造化していくかについて発表を行ったこと、今年度は、10月か1月に「教科教育学会と学校・教師の関係」に関する発表を求め

られており、必要に応じて関係者と相談しながら対応することが伝えられた。教科教育コンソーシアムに関する内容はHPを参照されたい。<https://jcospa.org/symposium/>

5. 教科教育学コンソーシアムジャーナルへの投稿・査読について

赤木里香子理事より公募である教科教育学コンソーシアムジャーナルに、今年度論文1本の投稿があり、経験ある査読者への協力依頼が見込まれることが伝えられた。

Ⅲ 事業部関連

1. 藝術学関連学会連合

神野真吾理事より、「文明化と藝術」をテーマに7月25日に対面・オンライン併用のシンポジウムが開催されたこと、詳細はHPに掲載されていること、テーマが広く議論が拡散したとの振り返りもあり、次年度の企画時には理事からも意見を募る予定であることが報告された。

2. 教育関連学会連絡協議会

丁子かおる理事より、大学におけるカリキュラム改正等に関し協議の必要性が指摘されていたものの、会議開催には至らず、日本教育社会学会から中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会部会長宛てに「教員養成制度改革に関する要望書」が提出されたことが報告された。また、「AI時代、未来は誰にとって公平か？」をテーマとする公開シンポジウム(9/19)の案内が共有された。

3. 全日本美術教育会議(8団体連携会議)

三澤一実理事より、早稲田大会の後に会議が開催され、持続的な組織運営について話し合いが行われたことが報告された。具体的には、日本美術教育連合に事務機能を担ってもらう方向を検討していること、委託金による事務委託か、賛助会員としての参画か等、具体的な関係を今後関係団体と協議すること、公益社団法人として総会承認・規約改正・内閣府審査等も必要になるため、恒常的な組織化には時間を要する見込みであること、今後美術教育上の課題を国へ継続的に提言できる組織の確立を目指すことが報告された。

4. リサーチフォーラムの運営

大泉副代表理事、栗津謙吾理事、北野諒理事より、今後開催予定のリサーチフォーラム3件について報告があった。一つ目は、9月19日に成城学園初等学校で、Zoomによるライブ配信を併用したフォーラム「美術科教育としての『造形遊び』と、それ以外の『造形遊び』」である。理事会時点で参加申込は約90名で、オンライン参加が多数を占めていること、高学年の造形遊びの授業映像を共通資料として、授業者・参観者・子どもの三者の見方を比較検討するとともに、教科教育の枠を越えた造形遊び的な活動について、中学校等の実践事例も含めて検討する二部構成で実施することが報告された。二つ目は、2027年1月24日及び2月28日に東京で対面・オンライン併用により開催予定のフォーラム「戦後美術教育の歴史的検討2ー理想と現実の狭間でー」である。昨年度に大阪で開催された「戦後美術教育」をテーマとするフォーラムを発展的に継続する企画であり、2日間にわたり戦後美術教育について検討することが報告された。三つ目は、2027年3月26日にオンラインで開催するフォーラム「Art Education in the Era of Cultural Dialogue」である。以上3件については、事業部で審議し開催が了承されていることが報告された。

なお、リサーチフォーラムは規程上、年間3件程度を基本としているため、さらに申請があった場合には代表理事と相談の上、事業部で開催について検討することとした。また、前回理事会で出された各リサーチフォーラム間の交流を促進してはどうかとの意見について、企画者にも働きかけており、今後、フォーラム相互の交流を積極的に促進していくことが確認された。

5. 第4回国際研究セミナーの申請の承認について(国際局)

中村理事より、今年度より公募を開始した国際研究セミナーについて1件の申請があったこと、ウィーン教育大学の研究者を中心とする「関与型学習としての美術教育：包括的な学校教育、民主的文化、地域コミュニティの接続」をテーマとした企画、申請額25万円について事業部長と国際局委員会で審議・採択されたことが報告された。

宮脇理先生を偲ぶ・いつもニコニコしているおじさんでした

In Memory of Prof. Dr. Osamu Miyawaki “He was a gentle, smiling older man.”

柴田和豊（東京学芸大学名誉教授・第5期美術科教育学会代表理事）

学会代表理事の佐藤賢司先生より、本年5月に逝去された宮脇理（みやわき おさむ）先生への追悼文の執筆依頼を頂いたとき、直ぐに一つの表題が浮かんできました。「いつもニコニコしているおじさんでした」がそれです。厳しく鍛えられたであろう優秀なお弟子さんたちとは違い、私にはいつもニコニコと接してくださいました。

私が、先生と頻繁に連絡を取り合っていた時期は1993年秋頃から1998年春頃までのことと記憶しています。宮脇先生が美術科教育学会代表理事を、そして花篤實（元大阪教育大学）、石川毅（元東京学芸大学）両先生が副代表理事をお務めになっていた強力な学会執行部に、東京学芸大学が事務局として途中参加するようになってからです。局員は会計担当の増田金吾先生と、総務担当の私の2名でした。

宮脇先生が代表をなさっていた期間は1992年4月から1998年3月までの二期6年でした。奈良での小さな研究会としてのスタートから10年少しを越えた段階での学会は、それまでの努力が実り、新たな飛躍を望めるところまで来ていました。それに伴って、以前からの様々な業務の他に、学会誌の編集・刊行体制の刷新や、各地で行うシンポジウムのさらなる活性化、事務体制の外注化の実現などで、事務局も多忙でした。意義を感じる案件ばかりでしたが、重なってくると思えてきます。その大変さを助けて下さったのが宮脇先生のニコニコ顔だったのです。笑顔は疲労気味の事務局員への労いの気持ちそのものであったと、今も感謝しています。

代表としての宮脇先生の特長は、何よりも行動的であったということでしょう。先生の業績が多岐にわたるものであることは周知の通りです。多彩な論文・著書類の執筆だけでなく、人に直接語りかける講演・討論などにも情熱を燃やしていらっしゃいました。それらの中から何より特筆すべきものを考えますと、学会の立場としては、やはり全20回に及ぶ出前シンポジウム・シリーズを挙げたくなります。1992年11月に「国際化・文化主義の中の美術教育の可能性」（東京・池雪小学校）で始まり、1998年1月の「大阪のパワフル美術教育は、いま！」（大阪教育大学）で幕を閉じる一連のシリーズに込められた先生の問題意識は熱のこもったものでした。

「これは、美術科教育学会が現実の教育の諸問題とどのような接点を持つかを模索する試みであり、実践に携わる数多くの先生方との交流を通じて、学会の研究そのものに新たな活力を導き入れようとする試みに他なりません。従って、このシンポジウムの性格が、従来の『啓蒙』といういささか硬直した姿勢とはおのずと性質を異にするものであり、討論と質疑応答の場を通じて多種多様な知性が出会う『運動』であることは明らかであると思えます。」（学会通信No.8）というお言葉は、行動する思索家ともいえるべき先生の特質をよく示しています。先生は北海道・沖縄を含む全20会場でのシンポジウムに参加されています。ただ一人の皆勤賞でした。

先生は1953年に東京教育大学（現筑波大学）芸術学科を卒業され、同年4月に北海道学芸（現教育）大学に奉職されました。その後、東京教育大学附属小学校教諭（1958：着任年・以下同じ）、福島大学専任講師・助教授（1960・1962）、文部省教科調査官（1971）、岡山大学助教授・教授（1975・1978）、横浜国立大学教授（1979）、筑波大学教授（1984）、佐賀大学教授（1993）として勤務され、教育実践と教員養成ならびに研究者養成に取り組まれました。その間、文章によるお仕事を、20歳代から90歳代まで倦むことなく続けていらっしゃいました。何よりそのことに、敬意を表したく思います。テーマも、たゆまぬ研鑽を反映して、工作・工芸とその教育、美術とその教育、映画、映像文化、教育一般、社会全般にわたる広範なものでした。普通、知的能力も歳を重ねるほど退化しますが、先生の場合は逆に瑞々しさが増していったように思えます。研究生活の前半（1975頃迄）では大学紀要がメインの発表媒体であったのに対し、後半は出版社による刊行が中心になります。その意義は、美術教育の役割を広く一般に伝えようとなさったこと、そして『感性による教育-学校教育の再生』（国土社1988）『工藝による教育の研究』（建帛社1993）のような優れた「単著」と並行して、多くの若い書き手を配した「編著」を続けてお出しになったことによく表れています。先生は、魅力ある企画を通して、「読者の獲得」と「若者に活躍の場を用意する」という課題に取り組まれていたのです。スペースの関係で一部の編著名のみを記させていただきます。『〈感性による教育〉の潮流-教育パラダイムの転換』（国土社1993）『デザイン教育ダイナミズム』（建帛社1993）『美術教育学』（建帛社1997）『4本足のニワトリ-現代と子どもの表現』（国土社1998）『緑色の太陽-表現による学校新生のシナリオ』（国土社2000）『芸術による教育（翻訳）』（共訳 フィルムアート社2001）『アートエデュケーション思考 - Dr. 宮脇理 88歳と併走する論考・エッセイ集』（学術研究出版2016）

宮脇先生 あらためてご厚情にお礼申し上げます。どうぞ安らかにやすみください。

故 宮脇 理教授 [博士] が追い求めた、美術教育におけるマクロな視点

The Macro-Level Perspective on Art Education Pursued by the Late Professor Osamu Miyawaki, PhD

山木朝彦（鳴門教育大学名誉教授・第11期美術科教育学会代表理事・現理事）

宮脇 理筑波大学元教授は、私の研究人生にとってかけがえのない恩師であり、大学教員として歩むべき道を照らし続けてくれたビーコンのような存在でした。物事の性質を見極める非常に繊細な感覚をお持ちで、ほとんど全ての計画を事前にシミュレーションしてから、はじめて実行に移される方でした。そして、決定したことは、予想外の困難や抵抗が待ち受けていたとしても、最後までやり抜く強い意志をお持ちでした。

このまま、生前の懐かしいお姿を描き続けたいところですが、限られた紙幅ですので、直近の企画・編集のお仕事と美術科教育学会でのご活躍を綴り、記録として残しておきたいと思います。前者については、北海道教育大学の佐藤昌彦名誉教授を中心にした実力派の研究者達と構想を練られ、出版した『アートエデュケーション思考 [副題省略：以下同じ]』（学術研究出版 2016）と、『民具・民芸からデザインの未来まで』（同上 2020）の2冊を記念碑的な業績として挙げさせていただきます。もちろん、単著の『アートエデュケーション思想』（同上 2022）も、碩学の宮脇先生だからこそ纏めることができた、近代の社会と文化を横断する思想探究の著作です。

次に本学会でのご活躍について簡単に述べます。2017年12月10日に大阪教育大学天王寺キャンパス西館ホールで開催されたリサーチフォーラム「〈工芸〉思考が切り拓く教育の未来—創作・学び・現代社会」（主催代表：佐藤賢司大阪教育大学教授）と2018年9月15日にサンライズ本宮（福島県本宮市）にて開催されたリサーチフォーラム「映画文化の美術教育的レジリエンス—映像メディア表現の力と可能性—」（主催代表：柳沼宏寿新潟大学教授 [当時]）では、それぞれ、工芸という営みに対する認識深化と、映像教育が持つ社会再生の力について論じておられました。どちらからでも、宮脇先生が日頃、提唱していらしたマクロな視点から美術教育を論ずることの重要性を学びました。すでに5年以上が経ちますが、清新なイメージを身に纏い、口頭発表をなさっていた先生のお姿がくっきりと脳裏に刻印されています。宮脇 理先生のご冥福をお祈り申し上げます。

相互啓発の運動体としての学会を目指して—宮脇理先生のご逝去に寄せて

Toward an Association as a Movement for Mutual Enlightenment:

In Memory of Professor Osamu Miyawaki

直江俊雄（筑波大学） Toshio NAOE (University of Tsukuba)

宮脇理先生は、本学会が1991年に初めて理事選挙を実施した後、理事の互選により選ばれた最初の代表理事として、1998年まで2期にわたって務められました。

また、同時期に、先生の持論でもあった「啓蒙ではなく相互啓発の運動を」「学会を外に開いていかなければならない」という思いを実行すべく、通称「出前シンポジウム」（正式には「公開シンポジウム」）を、先生がよく用いられた言葉を借れば「手弁当で」、全国各地の協力者とともに開いていかれました。こうした取り組みが、現在の「リサーチ・フォーラム」の源流となったのです。先生が常に語っておられた、「芸術の創造過程が社会のエレメンタリな過程でなければならない」という理想を、美術教育を掲げる学会こそが運動論として体現しなければならない、という思いから、現実の歩みとして一つ一つ切り開かれたのだと感じています。

現代的な組織構築という面だけでなく、若い人たちが育っていくことを、先生は何より喜ばれる方だったように思います。先生の周りにはいつも個性的な人たちが集まり切磋琢磨していました。先生が目をかけておられた学生や若い研究者がいかに関心を持っているかを本当に嬉しそうに語り、またそのことによって私たちを鼓舞し続けてくださっているようでした。そして何より、映画論から現代思想までを自在に行き来しながら、常に「未来から現在を逆照射する」視点で社会や教育を鋭く論じていくあの語り口、魅力的な深い声で繰り出される論評の一つ一つをお聞きするのが、私は本当に好きでした（そのために先生の学生になって美術教育を学び始めたと言ってもいいくらいです）。服のあちこちに絵の具をつけてキャンパスを歩き回っていた私がたまたま頑張って書いたレポートを、先生が授業でほめてくださったことが、美術教育に目を開いたきっかけでした。キャンパスを早足で歩いて行かれる先生の後ろ姿になかなか追いつけない夢を、若い頃からよく見るのです。

宮脇理先生、ありがとうございました。 Thank You, Professor Miyawaki.

赤木里香子（岡山大学）

宮脇理先生の訃報に接し、心よりご冥福をお祈りいたします。10年前、先生の米寿記念の本に、横浜国立大学の修士課程で先生から学んだことについて寄稿させていただき、「これからも先生の思考に揺さぶられ、驚かされてみたい」と結びました。それが叶うことを信じ、追悼として個人的な思い出を記すことをお許してください。

1984年、先生は筑波大学着任後も横浜で授業を行い、院生を各種の研究会に参加させてくださいました。そのひとつが計画段階の横浜美術館「子どものアトリエ」の研究会でした。美術館に子どもが来ては迷惑だとの声があると聞いても、先生は「当たり前になります」と涼しい顔をしておられました。年度末には、先生の勧めで美術科教育学会第7回神戸大会に初参加しました。研究会や学会が楽しい場だと知ったのも、先生のおかげです。

2年後、私は筑波大学の博士課程に進学し、修了までの5年間、宮脇先生に直接ご指導いただきました。1年目は、美術科教育学会第9回筑波大会に向けて懇親会の心配をすることから始まりました。先生のリーダーシップのもと院生達の協力で開催に至る頃、私の研究テーマもようやく定まり、美術教育における「自然」の意義について歴史的変遷を辿りながら考察することになりました。執筆が捗らない私を叱咤激励するためか、先生は時々「私も書いているんだよ」とご自身の博士論文の草稿を見せ、「70歳過ぎても本を出すからね」と笑顔を向けられました。先生の数々の予言(?)は実現され、今後ものとする可能性があるのですから、やはり驚くばかりです。

宮脇先生が在職されたことのある岡山大学に赴任した私は、数年前、教室の書棚の奥に先生の翻訳によるエルンスト・レットガー著『粘土による造形』（造形社、1977年）を見つけました。訳者あとがきには、造形することを「人間の自然の営み」から切り離し、人為的なシステム化を進める近現代社会への危惧が示唆されています。先生が常に、人間が意図的につくる制度や社会的に形成される規範が持つ力とその限界について意識を向けなければならないと説かれた根底には、「自然」について考え続ける姿勢があったことに改めて気づかされました。

2025年1月、第47回岡山大会に「ぜひ参加するから、よろしく」とお電話いただいたのが最後となりましたが、宮脇先生を核に生まれたつながりをこれからも大切にすることを誓い、謹んでお別れの言葉といたします。

書評 Book Review

著者：清田哲男・勅使河原君江・辻田美和・藤田雅也・須増啓之・松浦藍 編著，発行：あいり出版，
2026 年 3 月 31 発行，ISBN：978-4-86555-124-1

感受による創造性アート授業の実践 福来四郎アートコミュニケーションプロジェクト

佐藤賢司(大阪教育大学)

昭和 25 年から 55 年の、30 年におよぶ長い間、神戸市立盲学校で図画工作进行を指導した福来四郎（ふくらい・しろう）氏，本書は、福来氏が遺した約 2000 点に及ぶ児童の粘土像作品を出発点とした，研究者と現場教員による「福来四郎アートコミュニケーションプロジェクト（FAP）」の，極めて稀有な実践報告書です。そして，一般的ないわゆる「実践報告書」とは異なり，「感じる力」を鍵に，美術教育の本質―特に「授業」という構造への深い思考を根底に据えたことが，この本の最大の魅力です。福来氏の思想と実践を起点に「見る・つくる」という従来の美術教育の枠組みを崩し，感じ合うコミュニケーションのメディアとしての「感受アート」を定義した点がこのことを象徴しています。しかしまず，結論を急ぐ前に，編著者の思いを感じながら，本書の構成を順に追ってみたいと思います。

手の直感，心の感受

本書の「はじめに」は，短いながらも今後の議論の土台となる極めて重要な気付きを私たちに与えてくれます。このプロジェクトの中心を担う清田哲男氏は，次のように述べます。「福来先生が盲学校で，目の見えない，あるいは視力の弱い子どもたちと共に過ごされた日々は，きっと，ただそばにいてだけで人と人が感じ合い，幸せを実感できるような時間だったのではないかと想像します」。これはもう理屈ではなく，当時の子どもたちの作品を通しての，ご自身の率直な実感なのでしょう。「だからこそ，70 年経った今でも，子どもたちがつくった作品に触れるだけで，心が穏やかな幸せにそっと包まれるような感覚を覚えるのだと思います」と清田氏は続けます。私自身，児童画展などの審査の際には，画面＝紙をよく触ります。薄い絵の具やクレヨンの層であっても，見るだけの情報とは格段の差があります。触ることで感じる（と思える）ということに，深く共感します。

感じる力の復権・・・実感

本書の題名そのものである「感受アート」とは何か，その思想的骨子を鮮やかに提示しているのが第 1 章です。ここで清田氏は，「未来の教育は『感じる力』の復権からはじまる」と力強く宣言しています。海外の最新の教育動向にも精通し，特に STEAM 教育の研究で知られる清田氏が，ここで「感じる力」の重要性を唱える点には極めて大きな意義があります。効率性やデータ化が進む現代社会だからこそ，五感をフルに働かせる美術教育における「実感」の価値を再評価し，教育の根幹へと据え直さなければならないという危機感と確信をここに見ることができるのです。

さらに，藤田雅也氏が展開する「触ること」による鑑賞の重要性への指摘も，まさにこの未来の教育像を見据えるためのきっかけとなるものです。視覚的な美しさを外側から消費する鑑賞にとどまらず，対象に文字通り手で「触れる」ことによって内省的なダイナミズムを生み出すアプローチは，私たちが忘れかけている身体性を呼び覚ます契機となります。

体温を感じる地道な調査研究と活動

第 2 章「福来四郎がつくったもの」は，本書の中でも特に読み応えのあるところだと思います。福来氏の人柄を記した東山明氏のエッセイの回顧に続き，勅使河原君江氏によって描きだされた，綿密な資料調査や関係者への取材に基づく福来像は，まさに福来氏の体温や，何よりもその思想を強く感じさせてくれます。

現在神戸親和大学に保管される 2000 点もの盲学校の児童作品は，1992 年から 2005 年まで，実に 91 回もの貸出事業が実施されましたが，諸事情で 15 年間貸出が実質停止状態だったところ，2022 年から始まる FAP の活動により，再び貸出が始まり現在に至っています。この間の経緯は須増啓之氏が詳細に記していますが，ここからは福来氏の教育思想と子どもたちの作品を，現在・未来へとつないでいこうとする，関係者の熱い思いを感じと



ることができます。

豊かな実践群と、子どもの声

そして、本書で最もボリュームがあり、また中心となるのが第3章で紹介されている多くの授業実践です。幼保から大学まで、福来氏が指導した盲学校の児童作品を活用した実践が、実に23件も紹介されています。一つの実践につき4ページを割り、多くの写真とともに実践の様子が生き生きと語られています。項目は「こんな活動です（幼保）」「こんな授業です（小～大学）」「ねらい」・「福来指導作品との出会い」・「価値の創造」・「作品づくり」・「鑑賞の深まり」・「活動のふりかえりとこれからのこと」などです。実践により項目は多少異なりますが、すべてに共通しているのが「子ども（児童・生徒）の言葉」が紹介されていることです。

長友紀子氏の実践「触って感じるころのかたち」（中学校3年生）は、福来指導作品を触って鑑賞した後、教室を出て色々なものを触り、その後改めて福来指導作品を、作者のタイトルもあわせて鑑賞するというものですが、最後に生徒が記した「鑑賞ドキュメント」の文章をぜひ紹介したいと思います。

「私は祖母の手を握ったときの感触が強く記憶に残っている。入院している祖母のお見舞いに行ったときに談笑しながらよく手を握っていたのだが、温かみがあって、祖母と手をつなぐのが大好きだった。しかし、小学校の時に祖母が亡くなり、葬式で握った手は冷たく、いつもの祖母の手と違った。このことがとても印象的で、悲しみや驚きを感じた。」

「好きだったのは半紙の感覚です。小さい頃から書道を習っていて、わりと高い半紙を買わされていました。ただどこからこそいい作品が書けたと思います。裏と表がわかりやすく、独特の感触がとても癖になります。その中でも好きなのが、小学生の時の自分よりも大きい和紙に乗って正座みたいな感じで書くやつがあったんですけど、全身の肌で和紙を感じられて好きでした。」

感じること——固有の身体性と「共通感覚」

この中学生のリアリティある言葉こそ、「感じること」の力を示すものなのでしょう。そして何よりも大事なことはこれら「感じる」ことは、ひとり一人の生きる時間と身体に張り付いた経験であり、けっして他の誰かと交換可能なものではない、ということです。「子どもひとり一人」とよく言いますが、資質・能力のみをベースに語ってしまうと、ともするとそれは汎用性のある「誰にでも当てはまる」ものに収斂しがちであり、それを獲得・発揮するはずの個人は「匿名の不特定多数」に埋没してしまいます。これに対し、「感じる」ことは、どこまでもひとり一人の固有の身体での出来事であり、置換不可能なのです。

ここで、かつて中村雄二郎が『共通感覚論』で提示した知見を重ね合わせるならば、この固有の身体に根ざす「共通感覚（センス・コムニス）」こそが、実は、人々が社会的に分ち合う「コモン・センス」の基盤であることに気付かされます。けっして置換できない一人ひとりの生々しい感覚のなかにこそ、他者と深く繋がるための根源的な共通性が潜んでいるのです。

本書で紹介された多くの実践では、子どもたちが、かつて盲学校の児童がつくった粘土像に「触れて感じ合う」ことから活動が展開されます。時空を超えて、他者の手の痕跡（指の跡、粘土の歪み）を自分の手でなぞる行為。それは、単なる作品批評ではなく、深いレベルでの他者理解や共感を育むコミュニケーションへとつながるのです。

視覚優位の現代に一石を投じる触覚的アプローチ

現代の美術教育は、タブレット端末の導入、AIの普及を含め、あまりに視覚優位に偏っています。そんな中、本書は、手で触れ、形を探り、素材の抵抗感と対話する触覚的アプローチの重要性を説きます。身体と世界の接面と内奥からの、イメージ表出のプロセスの生々しさは、読む者に「表現の本質とは何か」を強く迫ります。

何より素晴らしいのは、「福来四郎の思想を、生きた形で子どもたちに手渡したい」という本書全体に貫かれている情熱です。編著者・実践者は、決して上から目線の実践分析ではない、子どもたちと同じ地平に立ち、共に驚き、共に「感受」しています。子どもの発言一つひとつを丁寧に拾い上げる温かな眼差しと、緻密な教育の言葉との往還。この圧倒的な誠実さが、本書を血の通った教育思想書へと高めています。

本書は、美術教育関係者のみならず、「他者と共感すること」の難しさに直面しているすべての大人たちに読まれるべき名著だと言えます。かつて盲学校の児童の手のひらから生まれた小さな粘土像と、それを生かした今を生きる子どもたちの学びの時間に、これからの社会を生きるための強く美しいヒントが隠されているのです。

改めて、このプロジェクトの活動と、編著者の方々に敬意を表するとともに、一人でも多くの方が本書を手にとって、まずは冒頭のカラーページ「GALLERY」からじっくり見て、何かを感じ取ってほしいと願います。

書評 Book Review

著者：永守基樹（和歌山大学名誉教授）、発行：学術研究出版、2026年3月発行、ISBN：978-4911449806

造形遊びの再布置化に向けて—メタ・アート思考が開く基礎教育課程

山木朝彦（鳴門教育大学名誉教授）

序章から読み進めていくと、この本は「美術教育思想の地層探究」とでも名付けるべき、グランドセオリーを論じた思想書ではないかという印象を評者は抱いた。「メタ・アート思考が開く基礎教育課程」という副題こそ、本題に相応しいのではないかという疑問に捕らわれたのである。この疑問が、「造形遊び」の背後に隠された文脈群へと読者を導くようにも思えるのだが、本稿では本書の企画の趣旨は次の一文に要約できるかもしれないという仮説を立ててみることにした。

それは「美術教育の諸文脈を造形遊び論に焦点化し、より包括的な観点から美術教育課程を再布置化する」というものである。キーワードになる「再布置化」という言葉の意味については、重層化した社会的文脈・文化的文脈とそれら言説間の関係性を解きほぐし、新たな意味を教育課程に見出し、付与することだと評者なりに措定した。

しかし、この一文に総頁数373頁を集約させることも不可能である。この矛盾を引き受けつつ、両者に架橋するために「造形遊び論議に〈美術〉を組み込む」という点に、まずはフォーカスして語り始めたい。

永守は教科教育学の役割を「文化的諸価値と子どもを同時代の状況のなかで出会わせて関係性を構築すること」だと言う。これは、自身がエッセンシャリストであることの表明の言葉であろう。

それを裏付けるかのように、「造形遊びは美術の価値のなかに生まれる学びだ」という主張が、本書中の様々な文脈で様々な文体によって語られている。その主張に沿って「美術」を歴史のなかに追っていく作業は、各章に見出されるのだが、美術史や表象文化論の文脈への視座は、意外なほどオーセンティックなものだ。

永守は「美術の終わり・以降」の美術教育課程の構想を提言しているのだが、語られる美術の歴史は美術史学の大筋を外れてはいない。その上で歴史を「変化」の相のもとに捉え、コミュニケーションの形態としての政治/経済/思考法などと照応させることによって、美術教育の文脈を浮かび上がらせる。

さて、本書の大きな目的は「造形遊びを基礎教育として美術教育課程に再布置化すること」である。そして、この基礎教育論の核心部分には「還元する基礎教育」と「構成する基礎教育」という対のコンセプトが登場する。これは相互補完的な性格を帯びている。つまり、身体や感覚で世界と出会うための「還元」と、感覚から論理によって意味やかたちを生み出す「構成」である。この二者の往還によって、あるべき基礎の学びが成立する。この対概念を歴史から抽出する手法にも、本書の特質を見ることができるだろう。すなわち、構成に関わるアートと還元に関わるアートという、モダニズム・アートの二つの流れが認められるということである。基礎教育を機能させるこの対概念は、この二者が生まれたアートの潮流に根差している。

この流れは、バウハウスの予備教育に転移され、それが戦前期日本の構成教育に移入される。そして初等中等教育へと姿を変えながら、戦後の造形主義美術教育の構成教育として学習指導要領にも導入され、さらに戦後前衛美術を経由して造形遊びに連なっていく。そこに、過去一世紀にわたる美術と教育の改革の運動を認めることができる。文脈が幾重にも撚り合わされたような時間のなかに美術の基礎の姿が探られ、いくつかの歴史的な文脈を横断し、照応させることによって造形遊びの性質が探られる。その本性は基礎教育であり、ここに位置する基礎の学びには「還元」と「構成」という対の学びが必然的に求められる。その意味で、「自発的な子供の遊びを教育的に組織化した学び」という、これまでの造形遊びの定義は、必然的に再検討を求められることになる。

本書にはもうひとつ「汎領域性」と「総合・応用」という重要な対のコンセプトが存在している。著者が構想



する美術教育課程の原型はバウハウスの教育課程であるということを知ると、より明快な理解につながるだろう。そこでは、基本となる諸工房教育を中層に、その上層に最終課程の建築、下層に汎領域的な基礎課程という三層が図式化されて示されている。ここでのポイントは、上層の総合と応用の教育課程と、下層の汎領域的基礎教育課程との照応関係にある。下層の基礎は上層の形によって決められる関係になっている。

感覚世界から造形世界を構成し、さらにメディアを総合しつつ、現実の環境や生活を造形するというバウハウス教育課程は、モダニズムのアートとデザインによってその整合的で体系的な教育課程を見せていたのだが、20世紀後半には次第に溶解して失効し、基礎と総合・応用の照応関係もそのダイナミズムを失う。

対照的に、20世紀後半美術に依拠し、モダニズムの終わりの時代に登場した造形遊びは、美術と学びの身体性に還元されたスタイルによって、汎領域的に造形活動を通底することが可能となった。しかし、照応されるべき上層（総合・応用）を失っている。それゆえ、この基礎の学びには、構成する論理も、メディアを複合させて総合的に表現する方法も、社会にコミットすることへの道筋も、見定めることが難しいという難点がある。

このような状況を永守は「造形遊びの閉ざされ」（＝現象学的言辞）という言葉で表現する。だが、興味深いことに、本書では造形遊びの「閉ざされ」は再びポジティブに捉え返されている。

造形遊びが依拠した1960年代を中心とする前衛美術は、ルネサンス美術、そして19世紀後半のモダニズム美術、さらに20世紀前衛美術の最終形態であり、いわば還元の極みの美術である。そうであってみれば、その「閉ざされ」は必然でもあり、この還元の果てに認識された世界こそ、人類が学ぶべき価値を持つはずである。しかも、普遍的な基礎の学びとして機能するはずである。このように指摘した後に、造形遊びの学びを基礎教育課程に半ば閉ざした上で、そこから開いていく通路を設定する提案をしているのである。

ここで押さえておきたいことは、同時代美術の史的展開と造形遊びを重ね見ていく著者の姿勢が、驚くほど首尾一貫していることである。

ネオ・ダダあたりから「もの派」の関根伸夫（1942～2019）の作品群、それを語る李 禹煥（1936～）の批評に至る論考（192～199頁）は、永守のロジックが冴え渡る部分である。表現主義的な内面表現から、「身体を媒介として内部と外部の対話を行う」（198頁）表現観への転換は、美術教育における表現のパラダイムの転換に連なり、同時代美術の転換がそのまま造形遊びを語るための巧みな伏線になっている。

伏線と見なすことはできるものの、視点を変えれば、前衛美術と教育双方の言説のなかで造形遊びは強く「閉ざされ」ている。そのことは、造形遊びにとって最重要の課題とも言える。著者は、造形遊びを「開かれ」（＝「閉ざされ」の対語的表現/現象学的言辞）に導く方略を同時代のアートに求めている。すなわち、1990年代以降に登場したメディア・アートと参加型アートである。

メディア・アートは「メタ・メディア」として教育課程に柔らかなまとまりを与え、かつての「総合」に代替しうる。参加型アートは社会に参与していく実践性を美術教育に与え、かつての「応用」に代わり得る。この二者を理念的なモデルとしたとき、美術の活動～学びには「コミュニケーションとは何か？」という問いが生まれる。それが「メタ・コミュニケーション」の学びを可能にするし、子ども・教師・教育課程に共有されるためのフレームとして「メタ・アート思考」を成立させる。

本書で展開される著者の思考方法は、オリジナリティーの度合いが高く、一読すると難解な印象を与えるが、丁寧に読み解く姿勢さえあれば、アートの学びというコンセプトが少しずつ結晶化し、「メタ・アート思考」にたどり着くプロセスをつぶさに知ることができ、誰もが魅惑されるに違いない。それは、ある種、スリリングに展開する思考の冒険を垣間見ているようである。

著者は、自らの教育課程構想について、造形遊びを再布置化するための「掘っ立て小屋」だと後書きに記したが、実は周到に、美術と子どもと教育の関係性を見極めと説明を行い、更新のプランまでも提供している。思考の冒険は驚くほど現実的な提案と結びついているのだ。

本稿で素描したとおり、緻密な論述によって成立している本書は、未来を見据えた造形遊びの論考である。しかし同時に、美術教育の全体に関わる貴重な教育課程構想なのである。教科教育研究の本領は、カリキュラム論にあると永守は言うのだが、私達もまた、カリキュラムに言及するこの教育課程の提案に対して、真摯に向き合う必要がある。

なお、本書の出版に至る過程で、次世代を担う北野諒氏と清家颯氏が編集者として助力している。本書がこのような次世代の研究者達に愛読され、現在の閉塞状況を打破する力となることに期待したい。

【謝辞】 評者の理解が至らぬ箇所について、著者から貴重なご助言を賜りましたことに感謝を申し上げます。

著者：増田金吾(東京学芸大学名誉教授)，発行：春風社，2024 年 12 月発行，ISBN：978-4861109935

師範学校と図画教育—赤津隆助を事例として

山木朝彦（鳴門教育大学名誉教授）

本書は歴史考証による特定の人物に対する徹底的な調査・研究の成果であり、文字通りの労作である。

今まで日本美術教育史の檣舞台にその名前が登場しないまま、今日に至った赤津隆助（明治 13（1880）～昭和 23（1948））という優れた美術教師にスポットライトを当て、その業績を明らかにしている。この研究の特徴的な点は、人物理解のための方法論にあるだろう。高齢となった赤津の娘たちや師範学校で赤津の指導を受けた、倉田三郎、熊本高工、箕田源二郎の 3 人にインタビューを敢行している。赤津隆助という一人の人間の全体像を把握したいという強い願いの表れである。

この浩瀚な著作のために費やされた歳月は約 20 年である。学位（博士）請求論文を仕上げるという使命感が、これほど長期間にわたって、著者の研究意欲を支えたのかもしれない。そして、その甲斐あって、増田金吾は、2018 年 3 月に論文「赤津隆助の図画教育思想とその実践」の学術的価値が高く評価され、東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科から、博士（教育学）の学位＝博士号を授与されている。

学位論文の公刊という性格をも有することで、本書には良い意味で微塵の隙もない。叙述の形式・内容ともに、曖昧な表現を避け、実証的な分析の積み上げによって、赤津の功績と人物像を浮き彫りにしている。洗練されたその手法は、歴史的な研究に携わる者ならば、誰もが見倣うべきものだろう。

その授与から 6 年半後に出版されたこの本には、「補論 ICT・デジタル的視点から赤津隆助の指導法を見る」という新たな論考も加えられている。本文についても、学位論文をさらに洗練させている。

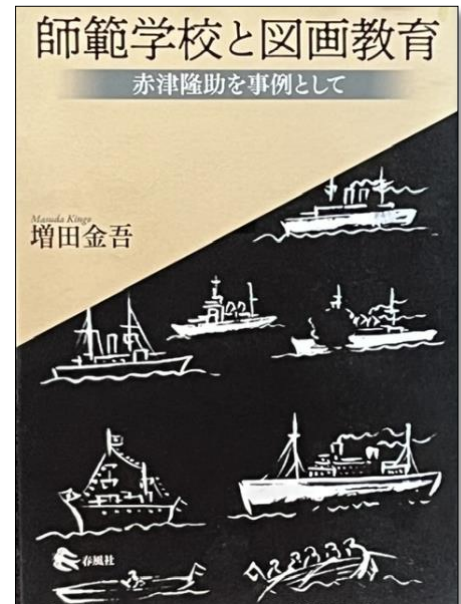
それでは、この赤津隆助という教師はいかなる人物なのであろうか。先行研究は、いずれも不十分な言及であり、いくつかの研究は誤植を含み、ある研究は赤津の独自性を認めず、赤津の業績を評価していない。

きわめて影響力もあり、情報の発信力においても絶大であったことは、彼の書いた著書と雑誌記事の総数が 220 点に上ること、そして、時勢悪化のため延期による未開催となったが、FEA(International Federation for Education of Art)の大会に際して、日本を代表する参加者として選ばれたこと、数多くの優れた美術教育の研究者や実践者を育てたことなどからも明白である。（なお、FEA 大会参加は叶わなかったが、赤津はこのときに欧米を視察している。）

とりわけ、志の高い数多くの美術教育者を育てたことは特筆に値する。正確を期すために本文（p. 13）から引用しておきたい。

東京府師範学校附属小学校訓導（現教諭）であった赤津隆助は、明治 41（1908）年 3 月 31 日、本校（東京府師範学校）兼務となる。附属小学校での教育実践経験を生かし、師範学校図画教育の指導を開始する。これを昭和 23 年（1948）に没するまで 40 年間同じ学校で続ける。こうした中で、多くの教え子たちと接する。

武井勝雄、倉田三郎、稲村退三、手塚又四郎、阿部広司、長谷川信也、増田喜恵蔵、西田藤次郎、熊本高工、箕田源二郎、山崎幸一郎、海老沢巖夫、根津三郎、日野照夫、稲垣達弥などの人たちは、全員が東京府青山師範学校（明治 41 年 11 月、東京府師範学校は東京府青山師範学校に改称される）における赤津隆助の教え子である。〔註記：原文には、氏名に振り仮名が振られているが、省略した。〕



この書評を読むほとんどの研究者が、武井、倉田、手塚、熊本、箕田らの名前や業績を知っているだろう。評者が調べたところ、そのほかの者もほとんど全員が著書を持つか、教育雑誌に自説を投稿した論客である。

自らも多大な情報発信力を持ちつつ、これだけの逸材を育てた赤津という美術教育者を徹底的に調査し、その業績と人物像を明らかにしたいという増田の願いはきわめて理に適っている。それは歴史研究における大きな未解明の空白を埋める仕事だと言えるだろう。

そして、この研究動機に従って、系統立てた方法による研究を積み重ねた末に増田が見出したものは、予想以上に堅実な教育実践者／指導者の姿である。それは、破天荒な振る舞いやスタンドプレーを嫌う、いわば中庸の思想なるものを生涯貫き通した教師の姿である。逆に言えば、激動の時代がもたらす波乱に富んだ生き方を避け、愚直なほど、普遍的な美術教育の理想を追究する姿だと言える。

自らの信念を貫くその姿勢は「第5章 赤津隆助の図画教育思想」(pp. 283-348) からリアルに読み取ることができる。山本鼎の自由画教育運動に関しては、彼の『小さい影』(青山師範学校内 赤津先生記念出版会発行 昭和2(1927)年)所収の「第15章 自由画教育に就いて」(pp. 135-154)にまとめられている。[初出は大正11(1921)年9月の雑誌「初等教育」であると赤津自身がこの章の終わりに記載している。]

これによると、「[前略] 創造的美術教育は図画教育の主要なる目的であることに異議はない」とし、「[前略] 山本の主張の長所を採用し、彼の助力を得て図画科改造の助けとしたい、と考える」とまで言う。しかし、赤津の批評眼は鋭く、「山本鼎の言う自由画は、近代洋画の傾向に偏しているようである。[後略]」と問題点を見抜いている。また、教師の役割と結びつく教授法について、全く顧慮しない山本の姿勢には、「どうしても賛成できない」と明言している。この判断には、師範学校の教師としての見識がストレートに現れている。

赤津は大正9(1920)年の新図画教育会の結成に加わり研究会を推し進めた点で、広義の造形主義的な発想に惹かれていたといえよう。この観点に立ち、次の分類の考案を主導し、それぞれの教法を具体的に示した。

それは、a. 観察(読図) b. 鑑賞 c. 考案 d. 描写 e. 簡易なる手工 f. 蒐集 (g. 実験) h. 説明である。「g. 実験」の項目は、新図画教育会は掲げたままだが、赤津はこれを不要と考えている。

現在の様々なカリキュラムの構成案とも、学習指導要領の内容の区分とも大きく異なる分類だが、指導内容はたいへん充実しており、偏りが無い。特に、鑑賞重視の姿勢は現代の教育と共通している。

この会においても、主導的な役割を演じた谷籾太郎(当時、東京附女子師範学校勤務)が、造形物のいわゆる形と色にこだわるのに対して、赤津は児童の心の《陶冶》こそ、重要だと考えている。同じ造形主義の範疇にありながらも、基本的な理念が異なっていたことをこのことから伺い知ることができる。

昭和4(1929)年には、学校美術協会(後藤福次郎主催)の会合で、霜田静志が思想画に替わる名称について参加者に問いかけ、他の案も出たが、最終的に赤津が提案した「想画」という名称が、記憶に基づき想起して描く活動に相応しいと採択された。

赤津は大正11(1922)年には「日常の実生活が皆題材」だと、新図画教育会著作の『図画教育の理想と実現』(培風館)において述べているが、その延長として、昭和6(1931)年には学校美術協会編『郷土化の図画手工』(学校美術協会出版部)の中で次のように確信に満ちた言葉を残している。

「郷土教育としての想画は、其作品が郷土の生活から生まれるのであるが、又其作品を郷土の生活の中に融合させ、郷土の生活の中に生きて活く様にしたいものである。[後略]」^(註)(本書 pp. 328-329)

この2年後には、山形県にある長瀬小学校の児童作品の表現に、村での子供たちの生活が反映した「想画」が実現していることを知り、赤津はこの学校に勤務する佐藤文利との交流を深めていく。

上述したように、さまざまな美術教育思想が生まれ、それぞれの思想を支持する者たちの動きが活発となる時代のなかで、それらの運動に深く関わりながらも、自分の価値観や信念を曲げることなく、図画教育の本質を見極めようと努めた赤津隆助の存在意義は極めて大きい。

もちろん、書名の『師範学校と図画教育—赤津隆助を事例として』が示す通り、赤津の教師としての歩みを追うことによって解き明かされたのは、戦前の師範学校という制度の実際とそこで行われた図画教育の実践の詳細である。このことによって、本書はこの時期の日本の美術教育史研究を志す者にとって、欠くことのできぬ基本文献の座を獲得したと言っても過言ではない。

(敬称略)

(註) 引用文中の「其作品」という表記は、赤津の原文のままの表記である。「活く」の箇所「活」には、増田によって、ふりがなの「い」が振られている。本書全体を通じて、現代の読者のために、緻密に振り仮名が振られており、誤読を避ける配慮がなされている。歴史上の人物を論じる際に、この配慮はありがたい。

2026 年度リサーチフォーラム in 東京 案内

Notice of the Research Forum 2026 in Tokyo

戦後美術教育の歴史的検討Ⅱ—理想と現実の狭間で—

有田洋子（茨城大学）

第1回 日時 2027 年1月24日（日） 13:00～17:00（予定） ※終了後に懇親会を予定しています。

会場 サロン ド 富山房 Folio（フォリオ）

住所 東京都千代田区神田神保町 1-3 富山房ビルB1（最寄駅：地下鉄「神保町」）

申込締切 会場参加：2027 年1月16日（土） オンライン参加：2027 年1月24日（日）正午まで

第2回 日時 2027 年2月28日（日） 13:00～17:00（予定） ※終了後に懇親会を予定しています

会場 サクラクレパス東京支店 会場：5 階会議室

住所 東京都台東区柳橋 2-20-6 サクラクレパス東京ビル（最寄駅：JR 総武線・都営地下鉄「浅草橋」）

申込締切 会場参加：2027 年2月20日（土） オンライン参加：2027 年2月28日（日）正午まで

後援 サクラクレパス

会場参加方法

各会場定員 40 名（先着順）。参加費無料。会場参加者のみの協議の時間を用意しています。

Peatix (<https://peatix.com/event/5204035>) よりお申し込み下さい。

オンライン参加方法

ライブ配信のみ予定しています（録音・録画不可）。参加費無料。参加時は氏名・所属の表示をお願いいたします。

Peatix (<https://peatix.com/event/5204128>) よりお申し込み下さい。

詳細

プログラム等の詳細は、新しくなった金子一夫の個人ホームページ「新・美術教育史研究所」に掲載予定です。

<https://sites.google.com/art-education-history.net/top>

趣旨と発表者

未来は過去と現在を基礎としないと描けない。戦後 80 年経った。美術科教育学会は創立 50 周年を目前に控えている。今後の美術教育を考える基礎として戦後美術教育史の研究成果を報告し、参加者と検討する機会としたい。昨年度フォーラム「戦後美術教育の歴史的検討—戦後美術教育は何であったのか—」で、発表及び参加者との協議を通して、戦後美術教育を戦時体制下からの「断絶」ではなく「継続」の視点で捉え直すことができた。美術教育学の立場で通念的戦後像を克服し、初めて本格的に戦後美術教育の始まりを明らかにする準備ができた。

この昨年度の成果を基盤に、今年度は、①現在の美術教科書の原型となった占領下図画工作科準教科書—重要なながらも 1989 年に初めて二つの先駆的研究が発表されて以来 40 年近く研究が途絶えていた—の全体像、②戦前・戦時下・戦後から現在までの美術教育運動及び戦後地方美術教育史、③戦後教育改革と美術教育等の個別研究成果の発表と参加者との協議を行う。教科書で制度的に教育されようとした内容、実際の美術教師たちの意識、占領下の全国的思潮と地方での実際等、理想と現実の相克を鍵に、戦後美術教育の始まりを立体的に浮かび上がらせる。



左：『しょうがくがこうさく』日本文教出版(大阪) 右：『しんずがこうさく』

第1回1月24日（日）新井哲夫（群馬大学名誉教授）、宇田秀士（奈良教育大学教授）、

金子一夫（茨城大学名誉教授・特命研究員）、有田洋子（茨城大学准教授）

第2回2月28日（日）長瀬達也（秋田大学名誉教授・特別教授・秋田県立美術館館長）、

赤木里香子（岡山大学教授）、金子、有田

〔協力 高橋文子（東京未来大学）、中川知子（つくば市立高崎中学校）〕

共催：2021-2026 年度科学研究費学術研究助成基金助成金（基盤研究(B) 課題番号 21H00865 代表：有田洋子）

問い合わせ先：有田洋子 yoko.arita.wk35 アットマーク vc.ibaraki.ac.jp

リサーチフォーラム案内 in 東京

Notice of the Research Forum in Tokyo

文化対話の時代における美術教育

中村 アレクサンドラ (School of Russian Academic Painting in Tokyo)

1. 趣旨

2027 年 3 月 26 日(金)に、オンライン国際リサーチフォーラム「文化対話の時代における美術教育(Art Education in the Era of Cultural Dialogue)」を開催します。本企画は東京を企画・運営拠点とし、モスクワ国立教育大学(MPGU)美術・グラフィック学部の参加・協力のもと開催されます。今日の美術教育は、異文化交流、伝統文化の継承、美術館等の社会的学習環境、デジタルメディアや生成 AI の発展など、多様な変化の中にあります。本フォーラムでは、日本、ロシアをはじめ各国の研究者、大学教員、アーティスト、美術教育者、教育実践者が集い、「文化的対話」の視点から現代の美術と美術教育を考えます。研究発表・実践報告は、次の4領域を中心に行います。

- A1 「文化対話と美術教育」** 異文化教育、バイリンガル教育、国際交流、文化的アイデンティティ、各国の美術教育・芸術実践
 - B1 「伝統美術・工芸と現代の美術教育」** 伝統美術、工芸、民俗美術、文化遺産、伝統技法の継承と現代的な教育・制作への展開
 - A2 「美術館・視覚文化・美術学習」** 美術館教育、視覚文化、作品鑑賞、美術館での描画・制作活動、地域・コミュニティの美術教育。
 - B2 「生成 AI と美術教育」** 生成 AI、デジタルメディア、視覚教材、AI を活用した制作・教育実践、教育的・倫理的課題
- 予備研究のみならず、学校、大学、アトリエ、美術教室、美術館等での実践・経験を共有し、異なる文化的・教育的背景をもつ参加者の対話を通して、これからの美術教育の可能性を考えます。

2. 登壇者 (予定)

- Prof. Stanislav Petrovich Lomov** | ロシア モスクワ国立教育大学 (MPGU) 美術・グラフィック学部学術指導者。N.N. Rostovtsev 記念美術教育方法論講座教授、絵画講座教授、教育学博士、ロシア教育アカデミー正会員、ロシア芸術アカデミー名誉会員、MPGU 学位論文審査評議会議長、ロシア芸術家創造同盟理事、中国・河北大学および天津大学名誉教授
- Assoc. Prof. Konstantin Mikhailovich Zubrilin** | ロシア モスクワ国立教育大学 (MPGU) 美術・グラフィック学部長、絵画学科長、准教授、教育学博士
- Ki Innis (Kimathi Roy Innis)** | アメリカ/日本 イラストレーター、アニメーター、映像作家。Master Drawing Japan 創設者、ハーワード大学卒
- Craig Chivers** | カナダ/日本 アーティスト、美術教育者、Ebisu Atelier d' Art (東京) 創設者・代表、York University B.F.A., New York Academy of Art M.F.A.
- Marc Sherratt** | イギリス/日本 日本で17年以上にわたり芸術活動に携わる。約10年間 Dr. Sketchy's のMCを務め、Tokyo Art Tank の展覧会にも複数回参加。
- Anna Bordilovskaya** | ロシア/日本 東京都市大学国語共通教育センター准教授。神戸大学大学院にて言語学博士号および修士号取得。元東京大学特任助教。日本において英語・ロシア語教育にも幅広く携わる。
- Evgeny Uzhinin** | モルドバ/日本 早稲田大学非常勤講師、言語・文学博士
- Alexandra Nakamura** | ロシア/日本 独立研究者、School of Russian Academic Painting in Tokyo 創設者・代表、モスクワ国立教育大学 (MPGU) にて研究活動。美術科教育学会会員
- ※ 登壇者は今後追加・変更される場合があります。

- 日時 2027 年 3 月 26 日 (金) 15:00~19:00 (日本時間) / 9:00~13:00 (モスクワ時間)
- 開催形式 オンライン (Zoom) ■ 参加費・定員 無料 (研究発表者約 20 名、聴講参加者約 100 名予定)
- 使用言語 日本語、ロシア語、英語、中国語、韓国語。自動翻訳字幕を利用予定
- 発表者募集 研究発表、教育実践報告、制作・専門的実践の紹介など、美術・美術教育に関する幅広いテーマ。美術科教育学会の会員・非会員を問わず参加可。
- 発表申込 発表題目、氏名、所属・職位、国・地域、E-mail、要旨 150~250 語程度 (日本語 800~1200 字程度)、キーワード 3~5 語。
- 主な日程 申込受付開始: 2027 年 1 月 15 日 / 研究発表申込締切: 3 月 7 日 / 採否通知: 3 月 11 日まで / 最終プログラム公開: 3 月 15 日 / 聴講申込締切: 3 月 25 日 / フォーラム開催: 3 月 26 日
- 申し込み方法 Peatix による事前登録制。アクセス・登録が困難な場合は E-mail でも申込可。参加申込情報は、2027 年 1 月 15 日頃、美術科教育学会ウェブサイト「リサーチフォーラム」のページにも掲載予定。
- 参加申込・詳細 <https://artedforum.peatix.com/> ■ 問い合わせ先 中村アレクサンドラ 8926988@gmail.com
- 企画・運営 企画・フォーラム代表: 中村アレクサンドラ (美術科教育学会会員 / School of Russian Academic Painting in Tokyo 創設者・代表)
- 協力 モスクワ国立教育大学 (MPGU) 美術・グラフィック学部

■ 2026 会計年度までの会費納入をお願いします

「2026 会計年度会費」は、2026 年 7 月末日までに納入いただくようお願いしています。3 月の大会、リサーチフォーラム、学会誌刊行などの学会運営は、会員の皆様の会費により運営されています。ご自分の各年度の年会費納入状況については、以下の「会員 情報管理システム」にログインすることにより確認が可能です。

<https://service.gakkai.ne.jp/society-member/auth/AAE>

なお、納入状況に疑問がある場合には、下記の本部事務局支局アドレスにお問い合わせ下さい。

＜留意事項＞ 学会誌への投稿並びに大会での口頭発表に際しては、投稿や申込みの時点で以下の 2 つの条件を満たしている必要があります。

- ① 会員登録をしていること。
 - ② 当該年度までの年会費を全て納入済みであること。
- * 会費を 2 年間滞納した場合は、会員資格を失います。

【会費納入に関するお問い合わせ先】

(株) ガリレオ 学会業務情報化センター 担当 佐久間
[窓口アドレス] g030aee-mng@ml.gakkai.ne.jp

■ 会費振り込み口座名・番号

会員の皆様に送付される振込用紙、郵便局にある払込用紙または銀行等からの振替により下記の口座に納入してください。

- ・ 銀行名： ゆうちょ銀行
- ・ 口座記号番号： 00140-9-551193
- ・ 口座名称： 美術科教育学会 本部事務局支局

通信欄には、「2026 会計年度会費」等、会費の年度および会員 ID 番号を記入してください。また、ゆうちょ銀行以外の銀行からの振込の受取口座として利用される場合は、下記内容を指定してください。

- ・ 店名(店番)： ○一九(ゼロイチキユウ)店(019)
- ・ 預金種目： 当座 ・ 口座番号： 0551193

上記振り込みのほか、年会費をクレジットカード決済することが可能です。この場合、決済手数料を学会が負担します。学会ウェブサイト (<https://www.artedu.jp/jaaed>) から決済画面に移動することができます

■ 住所・所属等変更、退会手続き

住所、所属先等に変更のあった方は、すみやかに本部事務局支局までご連絡ください。

退会をご希望の場合は、退会理由および退会希望日を記載した文書を作成のうえ、本部事務局支局宛てにお送りください。あわせて、在籍最終年度までの会費納入完了をお願いします。

美術科教育学会 本部事務局支局
〒170-0013 東京都豊島区東池袋 2 丁目 39-2-401
(株) ガリレオ 学会業務情報化センター 担当 佐久間
[窓口アドレス] g030aee-mng@ml.gakkai.ne.jp

■ 学生会員移行申請について

既に美術科教育学会の会員で、学生会員への資格変更を申請される方は、学会ウェブサイト (<http://www.artedu.jp/>) のメニュー「JAAEd 会員 > 入会」より「学生移行申請」書類をダウンロードし、必要事項をご記入のうえ本部事務局支局宛に郵送またはメール(PDF ファイルを添付)にてご提出ください。
＜学生会員について＞ 学部・大学院の正規課程に在籍する学生が対象で、在職の有無は問いません。ただし、聴講生、研究生、科目等履修生は対象外となります。

■ 新入会員について

2026 年 3 月 13 日の第 2 回理事会以降、2026 年 8 月 18 日までに入会申込書が受理され、第 1 回理事会で入会が承認された方々は下記の通りです(学生会員を含む)。

田代 琴美、渡邊 五大、長尾 菊絵、立松 里々子、増田 悠、島田 詩子、新名 佐和子、陳 丹瑩、古家 美和、稲葉 裕美、桑原 一哲、石川 愛、水口 元子、梅田 真紀、白井 眞子、廣野 岳史、佐藤 美和、辻 誠、新納 菜々子、松島 望、岡本 麻希子、金石 考弘、細谷 里香、久保田 羽菜、田中 友吏子、由井 蘭 隆也、武田 聡一郎、劉 文萱、黄 艺玮、新城 美由紀、篠塚 真希、齊藤 飛鳥、松尾 光代

■ 学会通信(佐藤絵里子)

年間 3 回の刊行(6 月、10 月、2 月頃)を予定しています。紙面には、学会からのお知らせのほか、会員の皆様からの原稿を随時掲載します。寄稿のご希望があれば、発行日の 2 か月前までにお知らせください。

■ リサーチフォーラム(大泉義一)

リサーチフォーラムは学会主催として、研究発表・シンポジウムを実施する場です。募集等詳しくは学会ウェブサイト (<http://www.artedu.jp/>) のメニュー「リサーチフォーラム」をご覧ください。

■ 学会ウェブサイト(手塚千尋)

美術科教育学会ウェブサイト <http://www.artedu.jp/> には、随時、学会からのお知らせを掲載しています。研究会の開催告知等の掲載を希望される場合は、本部事務局までお知らせください。

■ 一斉配信メール

年 3 回刊行される学会通信が公開された際に一斉配信メールにてお知らせします。g030aee-galileo@ml.gakkai.ne.jp より配信しますので、受信できるよう設定を再確認いただきますようお願いいたします。また、必要に応じて学会通信ではカバーできない案内をお伝えしていきます。

(以上)

美術科教育学会 本部事務局
Secretary Office
Japanese Association of Art Education



- 〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1 大阪教育大学
佐藤賢司（代表理事/教科教育学コンソーシアム理事） ksato@cc.osaka-kyoiku.ac.jp
渡邊美香（本部事務局理事/会員名簿） mwatanab@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

- 〒630-8528 奈良県奈良市高畑町 奈良教育大学
竹内晋平（総務担当副代表理事/本部事務局長/庶務・会計・規約） shimpei@cc.nara-edu.ac.jp

- 〒338-8570 埼玉県さいたま市桜区下大久保255 埼玉大学
内田裕子（本部事務局理事/出納管理） yuchida@mail.saitama-u.ac.jp

- 〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37 明治学院大学
手塚千尋（本部事務局理事/学会ウェブサイト） tetsuka@psy.meijigakuin.ac.jp

- 〒036-8560 青森県弘前市文京町1 弘前大学
佐藤絵里子（本部事務局理事/学会通信） eriko0220@hirosaki-u.ac.jp

- 〒739-8524 広島県東広島市鏡山1-1-1 広島大学
池田吏志（研究担当副代表理事/学会誌編集委員長） ikedas@hiroshima-u.ac.jp

- 〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1丁目6-1 早稲田大学
大泉義一（事業担当副代表理事/リサーチフォーラム統括/8団体連携会議） oizumi@waseda.jp

- 美術科教育学会 本部事務局 支局
- （株）ガリレオ(<https://www.galileo.co.jp/>) 学会業務情報化センター
〒170-0013 東京都豊島区東池袋2丁目39-2-401
（担当 佐久間） TEL 03-5981-9824 FAX 03-5981-9852 E-mail g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp